銀鼎

泉鏡花作

一

汽車は寂しかつた。

わが友なる　ーー　園が、自ら私に話した　ーー

其のお話をするのに、念のため時間表を繰つて見ると、奥州白河に着いたのは夜の十二時二十四分で

ーー

上野を立つたのが六時半である。

五月の上旬・・・・・とは言ふが、まだ梅雨には入らない。けれども、ともすると卯の花くだしと稱ふる長雨の降る頃を、分けて其年は陽氣が不順で、毎日じめ／＼と雨が續いた。然も其の日は、午前の中、爪皮の高足駄、外套、雫の垂る蛇目傘、聞くも濡々としたありさまで、　（まだ四十には間があるのに、壯くして世を辭した）　香川と云ふ或素封家の婿であつた、此も一人の友人の、谷中天王寺に於ける其の葬を送つたのである。

園は豫定のかへられない都合があつた。で、矢張り當日。志した奥州路に旅するのに、一旦引返して、はきものを替へて、洋杖と、唯一つバスケットを持つて出直したのであるが、俥で行く途中も、袖はしめやかで、上野へ着いた時も、楫棒をトンと下されても、あの東京の式臺へ低い下駄では出られない。泥濘と言へば、まるで沼で、構内まで、どろ／＼と流込んで、其處等一面の群集も薄暗く皆雨に悄れて居た。

「出口の方へ着けて見ませう。」

「然う、何うぞ然うしておくれ。」

さてやがて乗込むのに、硝子窓を横目で見ながら、例のぞろ／＼と押揉んで行くのが、平常ほどは誰も元氣がなさゝうで、從つて然まで混雑もしない。列車は、おやと思ふほど何處までも長々と列なつたが、此は後半部が桐生行に當てられたのであつた。

室はがらりと透いて、それでも七八人は乗組んだらう、女氣なし、縦にも横にも自由に居られる。

と思ふうちに、最う茶の外套を着たまゝ、ごろりと仰向けに成つた旅客があつた。

汽車は志す人をのせて、陸奥をさして下り行くー　早や暮れかゝる日暮里のあたりや森の下闇に、遅櫻の散るかと見たのは、夕靄の空が葉に刻まれてちら／＼と映るのであつた。

田端で停車した時、園は立上つて、其の夕靄にぽつと包まれた、雨の中なる町の方に向つて、一寸會釋した。

更めてくど／＼は言ふまい。其處には、今日告別式を濟した香川の家がある。と同時に一昨年の冬、衣繪さん、婿君のために若奥様であつた、美しい夫人がはかなくなつて居る・・・・・新佛は、夫人の三年目に、おなじ肺結核で死去したのであるが　・・・・。

園は、實は其の人たちの、まだ結婚しない以前から衣繪さんを知つて居た・・・・・と言ふよりも知

られて居たと言つて可からう。

園は從兄弟に、幸流の小鼓打がある。其の役者を通してである。が、興行の折の桟敷、又は從兄弟の住居で、顔も合はせれば、ものも言ひ交す、時々と言ふほどでもないが、ともに田端の家を訪れた事もあつて、人目に着くよりは親しかつた。

親しかつたうへに、お嬢さん・・・・・後の香川夫人は、園のつくる歌の愛人であつた。園は其の作家なのである。

「行つて參りますよ。」

と、其處で心で言つた。

汽車が出る。

がた／＼と搖れるので、よろけながら腰を据ゑた。恁の如く、がらあきの席であるから、下へも置かず、席に取つた　ーー　旅に馴れないしるしには、眞新しいのが見すばらしいバスケットの中に、　ーーお嬢さん衣繪の頃の、彼に　（おくりもの）　が

秘(ひそ)めてある。

二

今は記念と成つた。

友染の切に、白羽二重の裏をかさねて、紫の紐で口を縷つた、衣繪さんが手縫の袱紗袋に包んで、園に贈つた、白く輝く小鍋である。

彼は銀の鼎と言ふ・・・・・

組込の三脚に乗る錫の罐に、結晶した酒精の詰つたのが添つて、此は普通汽車中で湯を沸かす器である。

道中　ー　旅行の憂慮は、むかしから水がはりだと言ふ。・・・・・それを、人が聞くと可笑いほど氣にするのであるから、行先々〳〵の停車場で賣る、お茶は沸いて居る、と言つても安心しない。用心を通越した臆病な處へ、渇くのは空腹にまさる切なさで、一つは其がためにもつい出億劫がるのが癖で。

「・・・・・はる／〳〵奥の細道とさへ言ふ。奥州路などは分けて水が悪いに違ひない。ものを較べるのは恐縮だけれど、むかし西行でも芭蕉でも、皆

彼處では腹を疼めた　ーー　惟ふに、小兒の時から武者繪では誰もお馴染の、八幡太郎義家が、龍頭の兜、緋縅の鎧で、奥州合戰の時、弓杖で炎天の火を吐く巖を裂いて、玉なす清水をほとばしらせて、渴に喘ぐ一軍を救つたと言ふのは、蓋し名將の事だから、今の所謂軍事衞生を心得て、惡水を禁じた反對の意味に相違ない。」

と、今度の旅の前にも・・・・・私たちに眞面目に言つた。

何を、馬鹿な。

と平生から嘲るものは嘲るが、心優しい衣繪さんは、それでも氣の毒がつて、存分に沸して飲むやうにと言つた厚情なのである。

機會もなくつて、それから久しぶりの旅に、はじめてバスケットに納めたのである。

「さあ、來い、川も濁れ、水も淀め。」

と何か、美しい魔法で、水を澄せて從へさへ出來

さうに、銀鍋の何となくバスケットの裡に透く光を、友染のつゝみにうけて、袖に月影を映すかと思ふ。それも、思へばしめやかであつた。

窓の外は雨が降る、降る。
雪駄、傘、下駄、足駄。
幸手、栗橋、古河、間々田・・・・・の昔の語呂合を思ひ出す。

武左な客には藝しやがこまる。
芝の浦にも名所がござる。
ゐなか侍茶店にあぐら。
死なざやむまい三味線枕。

「鰻の丼は賣切です。」
「ぢやあ辨當だ。」
小山は夜で暗かつた。

嘗て衣繪さんが、婿君とこゝを通つて、鰻を試みたと言ふのを聞いて居たので、園は、自分好きではないが、御飯だけもと思つたのに、最う其は賣切れ

た・・・・・

「そら行け。」

どんと後で突く、

「がつたん／＼。」

と挨拶する。こゝで列車が半分づゝに胴中から分れたのである。

又ずしんと響いた。

乗つて來るものは一人もなし、下りた客も居なかつたが、園は急に又寂しい氣がした。

行先は尚は暗い。

開くでもなしに、辨當を熟々視ると、彼處の、あの上包に描いた、ばら／＼蘆に澪標、小舟の舳にかんてらを灯して、頬被したお爺の漁る狀を、ぼやりと一繪具淡く刷いて描いたのが、其のまゝ窓の外の景色に見える。

雨は小歇もない。

たゞ渺々として果もない暗夜の裡に、雨水の薄白いのが、鰻の腹のやうに蜿つて、淀んだ靜な波が、どろ／＼と來て線路を浸して居さうにさへ思はれる。

ほたり／＼と落ちて、ずるりと硝子窓に流るゝ雫は、鰌の覗く氣勢である。

三

バスケットを引揚げて、底へ一寸手を當てて見た。雨氣が浸通つて、友染が濡れもしさうだつたからである。

そんな事は決してない。

が、小人數とは言へ、他に人がなかつたら、此の友染の袖をのせて、唯二人で眞暗の水に漾ふ思ひがしたらう。

宇都宮へ着いてさへ、船に乘つた心地がした。

改札口には、雨に灰色した薄ぼやけた旅客の形が、もや／＼と押重つたかと思ふと、宿引の手ン手の提灯に黒く成つて、停車場前の廣場に亂れて、筋を流す灯の中へ、しよぼ／＼と皆消えて行く。・・・・・其の中で、山高が突立ち、背廣が肩を張つたのは、皆同室の客。で、こゝで園と最う一人　ー　上野を出ると其れ切寝たまゝの茶の外套氏ばかりを殘して、盡く下車したのである。

まことに寂しい汽車であつた。

やがて大那須野の原の暗を、沈々として深く且つ大な穴へ沈むが如く過ぎて行く。

野川で鰌を突くのであらう。何處かで、かんてらの灯が一つ、ぽつと小さく赤かつた。灯は水に影を重ねたが、八重撫子の風情はない。・・・・・一つ家の鬼が通るらしい。

黒磯　ー一

左斜の其の茶の外套氏の鼾にも黒氣が立つた。

燈も暗い。

野も山も、此の果しなき雨夜の中へ、ふと窓を開けて、此の銀の鍋を翳したら、きらりと半輪の月と成つて二三尺照らすであらう。・・・・・實際、ふと那様な氣がしたのであつた。が、其は衣繪さんが生きて居て、翳すのに、其の袖口がほんのり燃えて、白い手の艶が添はねば不可ない　・・・・・

自分が遣ると狐の尻尾だ。

と獨で苦笑する。其のうちに、何故か、バスケツ

トを開けて、鍋を出して、窓へ衝と照して見たくてならない。指さきがむず痒い。

こんな時は魔が唆かして、狂人じみた業をさせて、此を奪はうとするのかも知れぬ。

園は悚然として、道祖神を心に念じた。

眞個、この暫時の間は希有であつた。

郡山まで行くと・・・・・宵がへりがして、汽車もパツと明く成つた。思ひ見る、盤梯山の煙は、雲を染めて、暗は尚ほ蓬々しけれど、大なる猪苗代の湖に映つて、遠く若松の都が窺はれて、其の底に、東山温泉の媚いた窓々の燈の紅を流すのが遙々と覗かれる。

園が曾遊の地であつた。

バスケツトの中も何となく賑かである。

と次第に遠い里へ、祭禮に誘はれるやうな氣がして、少しうと／＼として、二本松と聞いては、其處の並木を、飛脚が通つて居さうな夢心地に成つた。

茶の外套氏が大欠伸をして起きた。口髭も茶色をした、日に燒けた人物で、ズボンを踏み開けて、どつかと居直つて

「あゝ、寢たぞ。」

と又欠伸をして、

「何の邊まで來たかなあ。」

殆ど獨言だつたが、しかし言掛けられたやうでもあるから、

「失禮　ー　今しがた二本松を越したやうです。」

と園が言つた。

「や、それは又馬鹿に早いですな。」

と驚いた顔をして、ちよつきをがつくりと前屈みに、肱を蟹の手に鯱子張らせて、金時計を撓めながら、

・・・・・・十一時十五分」

と鼻筋をしかめて、園を眞正面に見て耳に當てた。

「留つては居らんなあ。はてなあ、此汽車は十二時二十四分に、漸く白河へ着きをるですがな。」

と硝子に吸着いたやうに窓を覗く。

園も、一驚を吃して時計を見た。針は相違なく十一時の其處をさして、汽車の馳せつゝあるまゝに、セコンドを刻んで居る。

バスケツトを壓へて、吻と息して、

「何うも濟みません、少し、うと／＼しましたつけ、うつかり夢でも視たやうで、　ーー　郡山までは一度行つた事があるものですから・・・・・」

園も窓を覗きながら、

「しかし、何うも濟みません、第一見た事もありませんのに、奥州二本松と云ふのは、昔話や何かで耳について居たものですから、夢現に最う其處を通つたやうに思つたんです。」

燈が白く、ちら／＼と窓を流れた。

「白坂だ、白坂だ。」

と茶の外套氏が言つた。・・・・・向直つて口を

開けたが、笑ひもしないで落着いた顔して、
「此の汽車は、豊原と此處を抜くですで・・・・・・今度が漸く白河です。」
「何うもお恥かしい・・・・・狐に魅まれましたやうです。」
「いや、汽車の中は大丈夫　ーー　所謂白河夜船ですな。」

園は俯向いたが、
「　ーー　何方まで。」
「はあ、北海道へは始終往復をするですが、今度は樺太まで行くですて。」
「それは、何うも御遠方・・・・・」
彼の持ふるした鞄を見よ、手摺の靄が一面に、浸の形が樺太の圖に浮ぶ。汽車は白河）へ着いたのであつた。

四

「牛乳、牛乳　ーー　牛乳はないのか。　ーー夜中に成ると不精をしをるな。」

茶の外套氏は、ぽく／＼と立つて、ガタンと扉を開いて出た。

窓を開けると、氷を目に注ぐばかり、颯と雨が冷い。恰も墨を敷いたやうなプラットホームは、ざあ／＼と、さながら水が流れるやうで、がく／＼こう／＼と鳴く蛙の聲が、町も、山も、田も一齊に波打つ如く、夜ふけの暗中に鳴擴がる、聲は雲まで敷くやうであつた。

ト、すぐ裏に田が見えて、雨脚も其處へ、どう／＼と強く落ちて、濁つた水がほの白い。停車場の一方の端を取つて、構内の出はづれの處に、火の番小屋をからくりで見せるやうな硝子窓の小店があつて、ふう／＼白い湯氣が其の窓へ吹出しては、燈に淡く濃く、ぽた／＼と軒を打つ雨の雫に打たれては又消える。と湯氣の中に、ビール、正宗の瓶の、棚に直

と並んだのが、むら／＼と見えたり、消えたりする。・・・・・横手の油障子に、御酒、蕎麥、饂飩と讀まれた　・・・・・

若い驛員が二人、眞黒な形で、店前に立つたのが、見え隠れする湯氣を嬲るやうに、湯氣がまた調戯ふやうに、二人互違ひに、覗込んだり、胸を衝と開いたり、顔を背けたり、頤を突出したりすると、それ、湯氣は立つたり伏つたり、釦に掛つたり、耳を卷いたり、鼻を吹いたりする。・・・・・其の毎に、銀杏返の黒い頭が、縦横に激しく振れて、まん圓い顔のふら／＼と忙しく廻るのが、大な影法師に成つて、障子に映る。

で・驛は唯水の中のやうである。雨は冷く流れて降りしきる。

驛員の一人は、帽子とゝもに、黒い窪頸ばかりだが、向うに居て、此方に横顔を見せた方は、衣兜に兩手を入れたなり目を細め、口を開けた、聲はしないで、あゝ、笑つてると思ふのが、もの靜で、且つ

沁々寂しい。

其の一人が、高足を打つて、踏んで、澄してプラツトホームを横状に歩行出すと、いま笑つたのが掻込むやうに胸へ丼を取つた。湯氣がふつと分れて、饂飩がする／＼と箸で伸びる。

其の肩越に、田のへりを、雪が装上るやうに、且つ雫さへしと／＼と・・・・此の時判然と見えたのは、咲きむらがつた眞白な卯の花である。

雨に誘はれて影も白し、蛙は其の饂飩食ふ驛員の靴の下にも鳴く。

聲が、聲が、
「かあ、かあ、
白あ河あ。
かあ、かあ、
買へ、かへ、
うどん買へ、買へ、
しらあ、河あ。」　と鳴く。

あゝ風情とも、甘味さうとも　ーー　園は乘出して、銀杏返の影法師の一寸靜つたのを呼ぼうとした。

順禮がとぼ／＼と一人出た。

薄い髪の、かじかんだお盥結びで、襟へ手拭を卷いて居る、・・・・・汚い笈摺ばかりを背にして、白木綿の脚絆、褄端折して、草鞋穿なのが、ずつと身を退いて、トあとびしやりをした驛員のあとへ、しよんぼりと立つて、饂飩へ顔を突込んだ。　ーー

青膨れの、額の抜上つたのを視ると、南無三寶、眉毛がない、・・・・・はまだ仔細ない。が、小鼻の兩傍から頤へかけて、口のまはりを、ぐしやりと輪取つて、瘡だか、火傷だか、赤爛れにべつたりと爛れて居た。

其の口へ、　ーー　忽ちがつちりと音のするまで、丼を當てると、舌なめずりをした前歯が、穴に抜けて、上下おはぐろの兀まだら。　・・・・・

湯氣を搖つて、肩も手もぶる／＼と震へて掻食ふ。

「あ。」

あゝ、あの丼は可恐しい。

無論こんな事は、めつたにあるまい。それに、げつそりするまで腹も空く。

白河の雨の夜ふけに、鳴立つて蛙が賣る、卯の花の影を添へた、うまさうな饂飩は何うもやめられない。

「洗つてさへくれれば可いのだが、さし當り・・・・・・然うだ、此方の容器を持つて買はう。」

其處で、バスケツトを開けた。

中に咲いたやうな・・・・・・藤紫に、淺葱と群青で、小菊、撫子を優しく染めた友染の袋を解いて、銀の鍋を、園はきら／＼と取つて出た。

出ると、横ざまに颯と風が添つた。

成るたけ順禮を遠くよけて、　ー　最う人氣勢に後へ振向けた、銀杏返の影法師について、横障子

を裏へ廻つた。店は裏へ行抜けである。

外套は脱いで居た　ーー　背中へ雨も、卯の花も、はら／＼とかゝつた。

たゝきへ白く散つて居る。

「饂飩を一つ。」

と出しながら、ふと猶豫つたのは、手が一つ、自分の他に、柔かく持添へて居るやうだつたからである。　ーー　否、其の人の袖のしのばるゝ友染の袋さへ、汽車の中に預けて來たのに　ーー

「此へおくれ。」

銀杏返は赭ら顔で、白粉を濃くして居た。

驛員は最う見えなかつた。其の順禮のお盥髪さへ、此方に背き、早やうしろを見せて、びしや／＼と行く處を　ーー　（見なくとも可いのに）　氣にすると、恰も油さしがうつ伏せに鐵の底を覗く、かんてらの火の上へ、ぼやりと影を沈めて、大な鼠のやう

に乗(の)つて消(き)えた。
驛員(えきゐん)が黒(くろ)く、すら／／と、雨(あめ)の雫(しづく)の彼方(あつち)此方(こつち)。

五

他には數ふるほどの乘客もなさゝうな。餘り寂しさに、　ー　夏の夜の我家を戸外から覗くやうに　ー　恁う上下を見渡すと、可なりの寄席ほどにむら／＼と込む室も、さあ、二つぐらゐはあつたらう。　……

園の隣なる車は、ずつと長く通つた青い室で、人數は其處も少ない。が、しかし二十人ぐらゐは乘つて居た。・・・・・但し其も、廻燈籠の燈が消えて、雨に破れて、寂然と靜まつた影に過ぎない。

左右を見定めて、鍋を片手に乘らうとすると、青森行　ー　二等室と、例の青に白く抜いた札の他に、踏壇に附着いたわきに、一枚思懸けない眞新しい木札が掛つて居る　……

臨時運轉特別車
但し試用一回限り。

「おや／／・・・・・」

園は一寸猶豫つた。

成程、空きに空いた上にも、寝起にこんな自由なのは珍しいと思つた。席を片側へ十五ぐらゐ一杯に劃つた、たゞ兩側に成つて居て、居ながらだと樂々〳〵と肘が掛けられる。脇息と言ふ態がある。シイトの薄萌葱の・・・・・尤も古ぼけては居たが　ーー天鵞絨の劃を、コチンと窓へ上げると、紳士の作法にありなしは別問題だが、いゝ頃合の枕に成る。

「まてよ・・・・・」

衣繪さんが此邊を旅行した時の車と言ふのを、話の次手に聞いたのが　ーー　寸分違はぬ的切此だ・・・・・

「待てよ。」

無論、婿がねと一所で、其は一等室はあつたかも知れない。が、乘心の模樣も、色合も、いま見て思ふのと全く同じである。

「ー臨時運轉特別車。但し試用　ー　一回限り・・・・・」

と二行に最一度讀みながら、つい、銀の鍋を片袖で覆うて入つた。

饂飩を庇つたのではない。

唯、席に着くと、袖から散つたか、あの枝からこぼれたか、鍋の蓋に、颯と卯の花が掛つて居て、華奢な細い蕊が、下のぬくもりに、恁う、雪が溶けるやうな薄い息を戰がせる。

其の雪より白く、透通る胸に、すや／＼と息を引いた、肺を病んだ美女の臨終の状が、歴々と、あはれ、苦しいむなさきの、襟の亂れたのさへ偲ばるゝではないか。

はつと下に置くと、はずみで白い花片は、ぱらりと、藤色の地の友染にこぼれたが、こぼれた上へ、園は尚ほ密と手を當てゝ蓋を傾けた。

蓋のほの暖いのに、ひやりとした。

火に掛けて煮ようとする鍋の上へ、少くとも其の

花片は置けなかつたからである。

氣が着くと、茶の外套氏は形もない。ドキリとした。

が、例の大鞄が、其のまゝ網棚にふん反返つて、下に皺びた空氣枕が仰向いたのに、牛乳の罐が白い首で寄添つて、何と、・・・・・・添寝をしようかとする形で居る。

徳利が化けた遊女と云ふ容子だが、其の窓へ、紅を刷いたら、恐らく露西亞の辻占であらう。

では、汽車の中に一人踞つて、眞夜中の雨の下に、鍋で饂飩を煮る形は何だ？　・・・・・

説明も形容も何もない　ーー　燐寸を摺るや否やーー　アルコールに火をつけるのであるから、言句もない。・・・・・▬と朱が底へ漲ると、銀を蔽うて、三脚の火が七つに分れて、青く、忽ち、薄紫に、藍を投げて輕く煽つた。

ドカリ　ー　洗面所の方なる、扉へ立つた、茶色な顔が、ひよいと立留つてぐいと見込むと、茶の外套で恁う、肩を斜に寄つたと思ふと、・・・・・件の牛乳の罎を引攫ふが早いか　ー　聲を掛ける間も何もなかつた　ー　茶革の靴で、どか／＼と降りて行く。

跫音胤れて、スツ／＼と擦れつゝ、響きつゝ、驛員の驚破事ありげな顔が二つ、帽子の堅い廂を籠めて、園の居る窓をむづかしく覗込んだ。

其の二人が苦笑した。

顔が兩方へ、背中合せに分れたと思ふと、笛が鳴つた。

園は惘然とした。

「あゝ、分つた。」

狐が馬にも乗らないで、那須野ケ原を二本松へ飛抜けた怪しいのが、車内で燒酎火を燃すのである。

此が、少なからず茶の外套氏を驚かして、渠をし

て驛員に急を告げしめたものに相違ない。
と思ひながら、四邊を見た。
■したが誰も居ない。
「あゝ・・・・・心細いなあ　ーー」

が、その中はまだよかつた、・・・・・汽車は夜とゝもに更けて行き、夜は汽車とゝもに沈むのに、少時すると、また洗面た所の扉から、ひよいと顔を出して覗いた列車ボーイが、やがて、すた／＼と入つて來ると、棚を視め、席を窺ひ、大鞄と、空氣枕を、手際よく取つて擔いで、アルコールの青い火を、靴で半輪に廻つて、出て行くとて　ーー

「御病氣ですか。」
園は大眞面目で、
「いゝえ。」
「はあ。」
と首をねぢつて、腰をふりつゝ去つた。

此でまた、汽車半分、否、室一つ我ばかりを殘して、樺太まで引攫はれるやうな氣がしたのである。

「狂人だと思ふんだ。」

げそりと、胸をけづられたやうに思つた。

「勝手にしろ。」

自棄に投げる足も、しかし、すぼまつて、園は寒いよりも悚氣とした。

併しながら・・・・・此を見れば氣も狂はう。死んだやうな夜氣のなかに、凝つて、ひとり活きて、卯の花をかけた友染は、被衣をもるゝ袖に似て、ひら／＼と青く、其の紫に、芍藥か、牡丹か、包まれた銀の鍋も、チチと沸くのが氷の裂けるやうに響いて、ふきこぼるゝ泡は卯の花を亂した。

【完】